

同窓会誌

72



特集

「コロナ」と教育 エ・ト・セ・ト・ラ

-異常事態の中での模索-

特別企画

70年の母校の思い出

-これまでの「母校今昔」で振り返る-

島根大学教育学部同窓会

同窓会誌

令和二年

島根大学教育学部同窓会



No. 72

活躍する教育学部生

島根大学愛唱歌“すがしき風”の作曲を主導した

羽山歩里さんに教育学部同窓会「激励金」贈呈



羽山 歩里（あゆり）さん

教育学部音楽科教育専攻4年生

山口県山口市出身

島根大学開学70周年を記念して制定された島根大学愛唱歌“すがしき風”を同専攻の学生・教員の協力を得て作曲した。

“すがしき風”のリモート演奏は、

<https://www.youtube.com/watch?v=QUvHB5D69n0>

羽山さんは、幼いころから音楽に親しみ、ふっと思い浮かぶメロディーをメモし、メモができない時は後で思い起こして紙に書く、そんな積み重ねで新しい曲を生み出してきた。

大学2年生の時、国際ピアノデュオ協会が主催した、第21回国際ピアノ・デュオコンクール作曲部門において、本人の作曲した作品「クシレフへのオマージュ」が入選を果たした。



「クシレフへのオマージュ」の楽譜

きれいに印刷された楽譜の下は、羽山さん本人手書きのもの。



今後一層の活躍を！

卒業後は「大学院に進み、作曲の勉強を続けていきたい。将来は、大学等で研究に取り組みながら、作曲活動も続けていけると良い。」と羽山さん。今後一層の活躍が期待される「作曲家」である。

※P37に関連記事を掲載しています。

令和2年度と同窓会の活動

新型コロナウイルスに係る学部・学生支援



5月に緊急寄附として100万円。
9月に会員から寄せられた
募金180万円を贈呈しました。



9月10日 寄附金贈呈

教育振興奨励賞授与式



11月13日 縄田裕幸氏受賞

激励金贈呈式



11月13日 羽山歩里さん受賞

P4～5、36、37に関連記事を掲載しています。

今年度は、新型コロナウイルス感染防止のため、役員総会は書面による審議により実施、「ホームカミングデー」、「ほっと一息カフェ」、「こんにちは、先輩先生！」は中止とする等、同窓会事業を例年通り行うことができませんでした。したがって、このグラビアページも少し寂しい内容となっています。
本年の同窓会事業については、P38～40の「本部だより」をご覧ください。

目次

カラーグラビア①

活躍する教育学部生

カラーグラビア②

令和2年度と同窓会の活動

巻頭言 母校の応援団としての同窓会のあり方を求めて

—コロナ禍の教育学部・学部生への支援より—

教育学部同窓会副会長 恩田 元穂 …………… (2)

募金の報告 母校・困窮学生を支援しよう！

教育学部同窓会理事長 原 広治 …………… (4)

教育学部部長 加藤 寿朗 …………… (5)

特集

「コロナ」と教育 エ・ト・セ・ト・ラ …………… (6)

—異常事態の中での模索—

I 「コロナ」と学校教育 …………… (7)

II 「コロナ」の中での私の生活 …………… (14)

III 私の見た「コロナ」の中の社会 …………… (20)

IV 「コロナ」の中での大学生生活 …………… (23)

V 「コロナ」の中での大学の教育実践 …………… (26)

教職回顧 …………… (33)

第9回教育振興奨励賞に縄田裕幸氏決定 …………… (36)

活躍する教育学部生 羽山歩里さんに激励金贈呈 …………… (37)

特別企画 70年の母校の思い出—これまでの「母校今昔」で振り返る— …………… (41)

令和元年度島根大学教育学部卒業研究題目一覧 …………… (50)

令和元年度島根大学大学院教育学部研究科研究成果報告書・修士論文題目一覧 …………… (57)

令和2年版「同窓会名簿2020」発刊 …………… (60)

近況報告 本部だより…………… (38)

島根大学教育学部同窓会規約・同窓会個人情報情報の保護に関する規程 …………… (62)

事務局より …………… (59) (61) (66) (67) (68) (69) (70)

受贈図書紹介…………… (32) (60) 表紙に寄せて・編集後記

おことわり

新型コロナウイルス感染症が全国に広がっている状況や、大学では感染症拡大防止のために例年になく取組が行われているという現状に鑑み、毎号掲載しております「私の研究紹介」、「支部からの声」、「専攻だより」、「ただいま活躍中!!」、「有志会・同期生会だより」は、今年度掲載しないこととしました。



母校の応援団としての同窓会のあり方を求めて —コロナ禍の教育学部・学部生への支援より—

教育学部
同窓会副会長 恩田 元穂

新型コロナウイルスが猛威を振るった春先以来、我が母校、島根大学教育学部も学部生も非常事態に陥っています。感染防止のための「三密」が、学部生の「学びや生活」を急変させているのです。

新入生は期待を胸に春を迎えましたが、入学式は無く、授業は自宅で受けるオンライン方式が進められ、交流を深めるどころか、先生や友達の顔を見ることがさえ満足にできない状態です。また、二回生以上の学生も、対面や集団で行う実技教科や教育実習等ができず、先の見えにくい大学生活を送っています。一方、親元からの仕送りが滞る、アルバイトができないなど毎日の生活の維持が難しい学生も現れています。また、これらの不安から、休学・退学を考えている学部生もいるという状況もあるようです。

このような状況を深刻に受け止めた同窓会では、教育学部や学部生を支援するために、五月に同窓会の特別会計より、一〇〇万円の緊急寄附を教育学部に贈呈しました。しかし、この後も、学部生の学びや生活に大きな打撃が生じ、更なる支援が必要と考え、六月には学部卒業生の皆様に募金をお願いしました。そして八月までに賜った一八〇万円の浄財を、九月に教育学部に贈呈することができました。

この募金は、非常事態のため緊急なお願いになりましたが、多くの卒業生の皆様から次々と寄附金が届けられ、募金期間を延長せざるを得ない事態も起こりました。また、同窓会の呼びかけとは別に、研究室の同窓会・同期生の皆様からのたくさんの寄附金が贈られたことも聞いています。

考えてみますと寄附を寄せていただいた卒業生の皆様と現在の学部や学部生とは直接の繋がりはありません。それにも関わらず、寄附金がこのように多くの皆様から寄せられました。ここには、卒業生の、同じ教育者を目指した母校・島根大学教育学部に在籍したことがあること、現在の学部生の先輩として後輩を見守る気持ちがあることなどの、同窓意識とも言える学部や学部生に寄せる思いがあるように考えています。

現在、同窓会では、同窓会は学部や学部生を応援する気持ちを強く持つこと、また卒業生の皆様に応援する気持ちを強めてほしいことを願い、これを「同窓会は母校の応援団である」と意味づけて活動を進めています。今回のコロナ禍での卒業生の皆様の、母校の学部や学部生を支援していただいた姿は、私たちの考える、母校の応援団の具体的な姿と重なることが多く勇気づけられているところです。

これからは、「母校の応援団」という視点から、熱い、思い、や強い、繋がりが、が生まれるような活動を充実させると共に、応援団としての力を高める努力を、卒業生の皆様のご理解とご協力を得ながら進めていきたいと思います。

※本稿にある学部や学部生の状況は、令和二年九月頃のものです。

恩田 元穂氏 プロフィール

昭和二〇年、松江市美保関町（旧八束郡美保関町）生まれ

島根大学教育学部教育学研究卒業

教育学部教育学研究室・附属小学校、島根県公立小学校勤務

令和二年度より現職

〈募金の報告〉 母校、困窮学生を支援しよう！

緊急に一〇〇万円を、
募金一八〇万円を贈呈しました



教育学部同窓会理事長
原 広治

「これまでに経験したことのない」「五〇年に一度の…、一〇〇年に一度の…」「自分の生命と安全を守ってください」「自分の命、大切な人の命を守るための行動をおこしてください」。

これらの言葉は、もう四半世紀前のこととなった阪神・淡路大震災のころから耳にするようになり、今は、毎日のように聞こえてくるようになりました。災害時にはある地域にむけて発せられるこれらの言葉なのですが、新型コロナウイルス感染に関しては全国、全世界に対してですから、その影響は甚大なものであり計り知れないものがあります。また、その影響は私たちのすぐ

としては、今後も学生支援を継続して行うとともに、今年度の事業についても、状況をみながらですが、できることをできるカタチで進めてまいります。引き続き、様々にご支援、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

コロナ禍における学生支援、学部支援 ありがとうございます



教育学部長
加藤 寿朗

島根大学では、新型コロナウイルス感染症の影響拡大に伴い、令和二年度前期の全ての授業を原則としてウェブ等を活用した遠隔授業で実施しました。不慣れな遠隔授業による学修や友達との関係づくりが十分にできない大学生活の中で、学生並びに保護者の皆様にご不便やご迷惑をおかけしてきたところです。学部として十分な学修支援、環境整備ができていない状況の中、本年五月に教育学部同窓会よりご寄附をいただき、遠隔授業用の

横に座し、日々の暮らしのカタチを変えています。学生の暮らしも急変し、授業や友との語りはオンラインとなり、対面で行われる様々な体験活動やサークル活動は中止となり、仲間との談笑の機会までも奪われる状況となっています。なかには親元からの仕送りやアルバイト収入が激減し、毎日の生活を維持することも難しくなった学生も現れてきました。

そこで、本会では困窮する教育学部生や学部を支援するため、特別会計より一〇〇万円の緊急寄附を行いました（五月十五日）。しかし、学生の日常は大変厳しい状況が続いていることから、さらなる支援が必要と考え、本会会員の皆さまに対し、学生の学びと生活を守るための募金を六月からお願ひ致しました。八月二十四日までに、二七二名の皆さまから一八〇万円もの浄財を賜り、早速、学生支援に役立てていただくため、教育学部加藤寿朗学部長に対し贈呈いたしました（九月十日）。会員の皆さまからの御厚志に対しまして心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

教育学部（生）とその卒業生の応援団である本会

ノートPC（六台）・タブレット（十台）を学生に貸し出すことができました。また九月には、有馬同窓会長のお声かけで実施された「学生支援のための募金」による多額のご寄附も頂いたところです。同窓会の皆様のご厚情に心より感謝申し上げます。同窓会に支えられ、同窓会と共に歩む教育学部であることをあらためて実感しました。

今後も引き続き学生の学修をしっかり支援するように最大限努めてまいります。同窓会の皆様には、益々のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

募収支報告（決算…八月二十四日〆切分）	
●募金者・団体数（終身会員・支部等）	…二七二名
●募金総額	…二、〇一一、四九四円
●諸経費	…一四三、五一五円
●学部への贈呈額	…一、八〇〇、〇〇〇円
●残余金	…六七、九七九円

「Teat@同窓会No.12」から

70年の母校の思い出 —これまでの「母校今昔」で振り返る—

「母校今昔」は、平成21年2月に発行された同窓会誌60号から始まった「人氣シリーズ」で、昨年度まで同窓会誌の編集に永らく携わって来られた恩田元穂編集委員長の時を始められたものです。若い会員、年配の会員の両方に読んで欲しい記事として企画されたそうです。

同窓会員の皆さんにアンケートを取った訳ではありませんが、編集に携わる者としては、楽しく読める企画であり、さっと「人氣」のあるコーナーだと自賛しているところ

です。昨年は、大学が開学70周年を祝い、来年は、教育学部同窓会として70年の節目を迎えます。

今回、71号までの12年間の「母校今昔」から編集部で選んだ「力作」を再掲載し、母校の歩みを振り返ってみたいと考えました。



この12年間に掲載された内容は以下のとおりです。(★は今回再掲載したものの)

- ★60号 「スクールバスのいる風景」…1955 (昭和30) 年スクールバス導入
- 61号 「大学祭風俗50年の変貌」…50年前と現在の2つの大学祭を紹介
- 62号 「受講ノートと教案一毛筆から鉄筆へキーボードへ」
- 63号 「島根師範学校の遺産～伝え遺されてきた近代の標本たち～」
- ★64号 「大学前にある学生の集う店」…大学正門前の「名店」を紹介
- 65号 「教育学部の2つの玄関」…昭和43年と平成19年完成の正面玄関
- ★66号 「島大『学生食堂』事情」…学生の願いに応える食堂の努力を紹介
- 67号 「教育学部附属小学校『大手前』から『大輪町』へ」
- ★68号 「島根大学卒業式会場の変遷—大学講堂・旧第2体育館・県民会館—」
- ★69号 「教育学部『水泳訓練』の事実」…余話として水泳訓練の変遷を紹介
- 70号 「教育学部『音研定期演奏会』の変遷」…1954年「特音」設置から60年
- 71号 「島大のコンパ事情」…昭和から平成のコンパの様子の変化を紹介

大学前にある学生の集う店

〔1969年(昭和44年)頃〕

昭和44年頃、大学正門の道路を挟んだ正面に「佐藤商店」「名月堂」の2つの店があった(写真は学園紛争当時。後方に看板が見える)。「佐藤商店」は母親と娘さんで、「名月堂」は年配のご夫婦が、それぞれやっておられた。



今は無い「佐藤商店」と「名月堂」

どちらの店も、学生4人~5人が入れば身動きが出来ないような狭い造りであったが、3方

の壁の棚には、海苔巻き・さつま揚げ・串カツ・コロケなど、その場ですぐに食べられる物が所狭しと並べられていた。「佐藤商店」はその頃売り出されたヤンマーラーメンを作ってくれること、また、「名月堂」は学生向きの味の濃いなり寿司があることなどが喜ばれていた。

夕方になると、2つの店には、運動系の部員や学生寮生などが入れ替わり立ち替り訪れ、店の表で、串カツなどを頬張りながら、話している姿がよく見うけられた。

〔2012年(平成24年)頃〕



現在の「ファミリーマート」

平成24年の今は昔のような感じの店は無いが、かつて「美津屋」という唯一のレストランがあった正門前にはコンビニ「ファミリーマート」がある。

明るく、清潔感があり、品揃えも豊富である。店には食べ物だけでなく、生活の必需品なら何でも揃っている。

今は、店の表で学生が集まって、食べながら話す姿は見られない。何時しか消えてしまったようである。

スクールバスのいる風景



1959(昭和34)年の島根大学正門

島根大学は1949(昭和24)年に松江市西川津にあった旧制松江高等学校と外中原にあった旧島根師範学校が統合して発足しました。当初は、教育学部の先生方の授業は旧師範の校舎で、それ以外の科目は旧松高の校舎で開講されていましたので、教育学部の学生は受講科目に応じて西川津と外中原の間を行ったり来たりしなければなりません。徒歩で、自転車で、あるいは市バスを利用して。

その不便を解消しようと外中原と西川津を結ぶスクールバスが導入されたのは1955(昭和30)年のことでした。この写真には、西川津校舎の玄関(旧松高)前で学生達の乗車を待つスクールバスが写っています。

文部省あてに、スクールバス購入のための陳情文を書いたのが、当時学生委員だった田中現同窓会長だったとのこと。「書道部の友人に頼んで、毛筆の陳情文を整えて事務局長室に届けたら、君、字がうまいねえ、と誉められた」由。



現在の正門

門札は「国立大学法人島根大学」左脇に「島根大学憲章」の碑が建っています。

(写真は島根大学同窓会連合会絵ハガキによる)

島大「学生食堂」事情 余話

—学生の願いに対する食堂の対応—

—昭和37年～平成4年を中心に—

それぞれの年代によって学生食堂への思い出は異なるだろうが、学生にとって、早く・おいしく・安く・好きなものを食べられるということはいつの時代も変わらない願いであると思う。

島大の学生食堂でも学生の願いへの対応がその都度行われてきた。その足跡を探してみたい。

■「早く」食べられる

表紙裏の「学生食堂事情」で述べたように、学生が待つことなく早く食べられること（＝混雑を解消すること）は食堂経営の大きな方針であった。昭和40年の農大国立移管・昭和58年の文理学部改組等により学生数が増大する中で、2度にわたり第1食堂・第2食堂を建設することで、席数を増やし、混雑を解消してきている。

■「おいしいもの」を食べられる

学生がおいしいものを食べられるように、メニューや味の工夫は食堂

として絶え間なく力を注いでこられた。昭和40年代に書かれた「島根大学共済会記念誌—三十周年」から紹介したい。

「—若い人たちはカレーが好きである。今日の昼はカレーにしよう」と家を出る時から学生諸君が思うようなものにならないだろうか。何とか本式なものをと考える。先ず専門家を呼んで講習会を開かねばならない。私の近くに専門家を見つけ、ともかく講習会を開いた。カレーライスはまずダシを作る事からはじまる。鶏の骨をたくさん大鍋に入れて長い時間をかけて煮る。それから後の事はすっかり忘れてしまった。次にハヤシライスの講習。前後2回この講習を開いたと思う。昭和43年代はそのような時代であった。ただ朝から学生諸君にカレーを要求されて困ったと聞いたことがある。—」

■「安く」食べられる

学生に安く食べさせる努力は、食堂内では当然のこととして行われたが、時には、外部に対しても行われた。昭和48年には、時の内閣総理大臣・田中角栄氏に島根大学共済会理事から「物価値上げ反対声明」が出されている。

わが国の経済は、昭和30年代以降の高度経済成長の過程でインフレ政策を遂行し、国民大衆に諸物価上昇の苦汁を味わわせてきた。（中略）われわれの生活擁護のための共済会組織もこのような状況下では、会員の利益を守る防壁としての役割も大きく低下せざるを得ない。島根大学共済会はここに切実な要求として、大学人の生活を守るために、政府の国民生活破壊と物価値上げ政策に理事会の名において強く抗議する。早急に政府は、物価値上げ抑制のため、強力な措置を取られることを強く要望します。

一方、いろいろな諸策にかかわらず、主食等の材料・石油等の燃料をはじめ諸物価の値上げは続き、品目価格は値上がりが続いている。

ここで、以前から学生に人気のある、定食・カレー・ラーメンの価格の推移を見ていきたい。

「定食・カレー・ラーメンの価格の推移」

年	月	定食	カレー	ラーメン
S37	11	60円	60円	50円
S38	11	60円	60円	50円
S42	7	70円	62円	70円
S48	5	100円	80円	70円
S60	3	290円	220円	180円
H26	7	無し	291円	356円

※H26の定食は、品目が細分化され定食というメニューそのものがない。

■「好きなもの」を食べられる

昭和55年ごろから、食堂は、カフェテリア（好みの料理を自分で選ぶ）方式、メニューは軽食・麺類中心のものに加えて高級食堂化（ランチ中心）といった多様化が求められるようになった。これは学生の意識・生活の変化と共に、大学周辺で大学食堂と競合する店舗の新設がある。

学生食堂の品目（喫茶を除く）の推移は次のようである。

「学生食堂の品目（喫茶を除く）の推移」

年	月	品目数
S37	11	10品目
S48	5	20品目
S60	3	60品目
H26	10	200品目

※H26は、第1・第2食堂に同じ品目もある。

*引用・参考文献

島根大学共済発行

「島根大学共済会記念誌—三十周年」

（平成27年1月 同窓会誌66号より）

教育学部「水泳訓練」の事実 余話

—教育学部の水泳訓練の変遷について—

(1) 訓練初期のころ (古浦海岸)

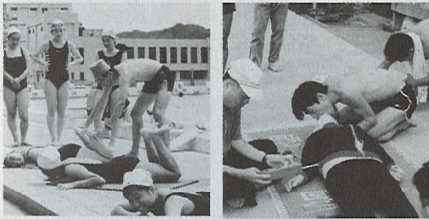
この頃の水泳訓練は、学部1年生全員を対象に3日間も鹿島町恵曇の古浦海岸で実施されている。この頃の学生の水泳能力を見ると女子のほとんどが泳げない者であり、女子学生の多い教育学部は教師としての水泳能力の獲得の必要性が痛感された。この訓練は学部の総力を挙げて実施され、教職員全員がこれに参加した。

水泳訓練の内容については、その当時の教授会の資料の水泳訓練実施要項や水泳訓練実施要領により知ることができる。以下、概要を紹介する。



昭和34年水泳訓練実施要項・恵曇海岸
訓練日程の概略

7月		A 班	B 班	C 班
8日	午後	講堂にて講義・水泳参加の心得		
	午前	水泳訓練	水泳訓練	水泳訓練
14日	午後	救助法 検定	同上	同上
15日	午前		同上	同上
	午後		同上	同上
16日	午前		同上	同上
	午後		同上	同上



以上のような訓練日程及び内容であるが、指導は事前に水泳能力の紙上調査を実施しており、A～Cの能力別班編成で行われた。

ちなみにA班は、「距離100m以上泳ぐことができしかも各種泳法が大体でき

昭和34年水泳訓練実施要領・
練習細目

7月		A	B	C
	午前	各種泳法 耐泳2000m	水なれ (水中遊戯)	水なれ (水中遊戯)
14日	午後	水上安全法 (人工呼吸法) 検定	浮きかた 犬かき	浮きかた 犬かき
	午前		犬かきばた足 呼吸のしかた	犬かきばた足 呼吸のしかた
15日	午後		横泳ぎ及び 平泳ぎ (泳法及び距離)	横泳ぎ及び 平泳ぎ (泳法及び距離)
	午前		水上安全 (人工呼吸法) 総合練習	水上安全 (人工呼吸法) 総合練習
16日	午後		検定 横泳ぎ・ 平泳ぎ 30m以上	検定 距離 25m以上

る」ものとなっており、男子学生の7割はこれに該当したが女子学生の7割はC班であった。このように訓練に参加する女子学生のほとんどはカナヅチ状態であったが、訓練への取り組む姿勢は真剣そのもので効果も大きかったようである。それには、悲惨な海難事故が身近で起きたばかりであり、また教員採用試験にも水泳の実技検査が取り入れられた経緯もあったようである。

(2) 昭和40年ころ (大学プール・北浦海水浴場)

この頃になると、大学に50メートル・8コースの立派なプールが新設され、3日間の水泳訓練のうち2日間をプールで基礎訓練を行い、3日目に美保関町の北浦海水浴場で実施されるようになった。また水泳訓練に参加する学生数も増え、能力別班編成もA～Eの5班編成となり、プールでの実習は午前と午後で入れ替わる方法がとられた。

＜能力別班編成の基準＞

- A班 ある程度、各種泳法ができ、約1000mの遠泳ができる。
- B班 50m位泳ぐことができる。
- C班 30m位泳ぐことができる。
- D班 多少泳ぐことができるが不充分である。
- E班 未経験者および全く泳げないもの。



(3) 昭和50年ころから中止になるまでの水泳訓練

昭和49年に小学校教員養成課程の入学定員が100名から140名に改定され、入学定員は300名と最高の学生定員となった。そのため水泳訓練のプールでの日程が過密化し、細分化されたものになった。

昭和59年ころの水泳訓練についての様子をうかがえる記述が「教育学部同窓会誌(第36号)」にあったのでそのまま記載する。

今夏もまた恒例の水泳訓練が3日間実施されました。数えて30回目。時代は変わり、泳げないと自称するグループはごく僅か、カナヅチはまず見られません。そればかりか海での遠泳に参加する女子学生の数が増えつつあり、明らかに小学生の時からプール訓練の徹底が反映しているようです。かって本学部で水泳訓練を受けた卒業生の子息・子女の幾人かが同じ水泳訓練を受ける光景を眺めると、この行事の年輪を感じます。

(厚生補導長 瀬戸 武司 記)

このように、この頃になると小・中学校のほとんどにプールが設置されるようになり、水泳の能力も当初を思うと格段の進歩がみられ、この年をもって永く続けられた教育学部の水泳訓練は幕を閉じた。

(平成30年1月 同窓会誌69号より)

島根大学卒業式会場の変遷

— 大学講堂・旧第2体育館・県民会館 —

昭和24年、島根大学（文理学部・教育学部）が設置され、第1回の卒業式は、昭和28年3月17日に行われている。

平成28年3月に行われた卒業式は通算63回目に当たる。教育学部のこれまでの卒業生（専攻科・大学院等を除く）は、14,176名になる。この間の卒業式会場は、大学講堂、大学旧第2体育館、県民会館と移り変わってきている。

大学講堂（昭和28年~39年）

第1回の卒業式は大学講堂（現在の本部棟の地にあり）で行われている。講堂は大正建築的な風格のある建物であった。



当時の卒業式の様子



昭和34年頃の大学講堂

大学旧第2体育館（昭和40年~昭和60年）

大学講堂の後は、大学旧第2体育館（現在の総合理工学部の地にあり）で卒業式が行われた。ただし、昭和44年の卒業式は、学園紛争のため行われず、学部毎に卒業証書並びに修了証書を授与した。

県民会館（昭和61年~平成27年）

大学旧第2体育館の後は、県民会館で行われた。ただし、平成28年の卒業式は県民会館改修工事のため、くにびきメッセで行われている。



平成28年の卒業式の様子



平成23年の卒業式の様子

(平成29年1月 同窓会誌68号より)

「母校今昔」余話 ～編集裏話～

○「母校今昔」は、平成21年2月に発刊の60号から掲載が始まりました。その頃の会誌の編集課題は、新しい企画を多くし、特に若い会員が読みやすい紙面の工夫をすることでした。会誌全体に写真を多くする、短い記事を多くするなど拳がっていました。「母校今昔」はその企画の一つとして考えられたものです。時代の異なる2枚の写真に、その時代の様子と学生の気質の違いを出していこうと考えました。

○上記と重なりますが、66号の「島大『学生食堂』事情」では、「定食・カレー・ラーメンの価格の推移」と「品目の推移」と取り上げました。年配の会員と若い会員それぞれが、「自分たちの時代のカレーは60円で、若い年代の時代のカレーは220円だ」などと比べながら自分の在学時を思い起こすことができるのではないかと考えました。

○執筆にあたって、一番苦労するのが「昔の写真」を見つけることです。編集会で「今昔」の内容が決まりますが、問題は昔の写真があるかということです。写真が見つからず取り上げる内容を変えたり、それに関わる写真で凌いだりすることもありました。会誌発刊後に求めていた写真が見つかった時はかなりのショックでした。

○執筆内容の下調べをしていると、「大発見」に出会うことがあります。66号の「島大『学生食堂』事情」では、資料の中に「昭和48年に、学生に安く食べさせるために、時の田中角栄内閣総理大臣に島大共済会理事会から『物価値上げ反対声明』が出されている。」（筆者要約）という記事を見つけました。誰が、どのように声明を送られたのでしょうか。

○学部の実情が分からず思わぬ失敗をすることがあります。71号はタイトルを「コンパの変化」として、昭和40年頃の島大生の「松江大橋のものみ台でのすき焼きコンパ」などを取り上げようと準備を進めていました。ところが現在の学部は20歳未満の飲酒禁止ということが分かりました。急いで「コンパ事情」と内容の変更をせざるを得なくなりました。

○会員から「今昔」の感想をもらうことがあります。その多くは掲載した写真に写っている方からのコメントでした。思わぬコメントもありました。64号の「大学前にある学生の集う店」に「佐藤商店は母親と娘さんで」という記述がありますが、「あの娘さんは今どうしておられるだろうか」とコメントが寄せられました。この方は、筆者より4歳年上でしたから、そのころの娘さんはもっと若かっただろうと予想しました。

○「母校今昔」は、1Pの原稿ですが、執筆にあたってたくさんのドラマと出会わせてもらいました。

(前編集委員長 恩田元穂 記)

令和2年度島根大学教育学部同窓会本部役員

会 長	有馬毅一郎 (松江支部)	黒田 章義 (松江支部)
副 会 長	加藤 寿朗 (教育学部) 恩田 元穂 (松江支部) 齋藤 重徳 (松江支部)	白石 隆子 (松江支部)
理 事 長	原 広治 (教育学部)	成相 僚一 (附属学校園)
副理事長	福田 哲之 (学部支部長)	大西 七恵 (松江支部)
会計監事	瀧野 一夫 (松江支部)	門脇 岳彦 (県中学校代表)
理 事	中村 次郎 (県小学校代表) 佐々木章友 (県立学校・公立高等学校代表) 津田 昌彦 (附属支部長) 春日 宏 (安来支部長) 仙田 健治 (浜田支部長)	岸本 強 (県立大学・高専代表) 米田 靖幸 (松江支部長) 坂本 達夫 (出雲支部長)
幹 事	山根 貴史 (教育学部) 福岡 敏之 (教育学部) 長岡 美沙 (教育学部) 長 和博 (松江支部) 小豆澤美博 (会誌編集担当) 片山 博子 (会誌編集担当)	山中 慎嗣 (教育学部) 作野 広和 (教育学部) 大給 玲子 (松江支部) 坂根 千歳 (松江支部) 安達 卓生 (会誌編集担当)
事務局員	山田 幸子	

クリックしてね!

教育学部同窓会ホームページご案内

島根大学教育学部同窓会 ウェブ検索 これで検索!

島根大学教育学部同窓会


〒690-8504 島根県松江市西川津町1060 (教育学部棟内)
TEL : 0852-32-6297
E-mail : e-dousukai@edu.shimane-u.ac.jp

TOP

- 会費あいさつ
- 規約・個人情報
- 会費納入取り扱い内線
- 同窓会報章
- 卒業計画
- 卒業報告
- 検分報告
- 同窓会誌・同窓会広報誌
- お知らせ
- 入会の方法
- 住所変更届
- リンク

新着情報

- 【基金報告と去就】 (New)
- 【新着】「コロナ」に学ぶ学生生活の大切さ (New)
- 【「会費」レポート】 支援致します (New)
- 【「同窓会」に「は」は、先輩先生へお知らせ (New)
- 【「おめでとう」おめでとう】 (New)
- 【「同窓会」の「お」お知らせ】 (New)
- 【「同窓会」の「お」お知らせ】 (New)



Copyright (C) 2006 島根大学教育学部同窓会. All rights reserved.

TOPページへ

会員の皆様に、できるだけ新鮮な情報を提供できるよう努力しています。母校の様子が気になりましたら、お気軽に「島根大学教育学部同窓会」でご検索ください。ご意見やご感想もメールにてお寄せいただけます。
<http://www.suaa2.shimane-u.ac.jp/edu/>

受贈図書紹介

『友朋』第四十七号
 (昭和三十六年辛酉四課程第九期生同窓会誌、令和二年十一月)



今年も「友朋」(四十七号)が届いた。編集に当たられた松江部の皆さんのご苦労が偲ばれる。「編集後記」には、コロナ禍で「実行委員会」が開催できない日々が続き、やっと開催できた折に、同窓会開催の見送りと「友朋」発行とが決定された、と記されている。原稿依頼が遅れた分、原稿の集まりも心配されたようだが、逆に「友朋」が発行されるかどうか心配し、編集部を気遣う方もいらつしたようだ。皆さんのご努力で発行が継続されたことに敬意を表したい。さて、それぞれの記事には当然、「コロナ」の文字が多く見られる。近況を報告しようと思えば、当然そうなるであろう。ただ、そのことを予想してであろうか、編集部が仕掛けた特集が三つ掲げられている。内容は(1)「大学時代の思い出」(2)「今一番楽しんでること」(3)「友朋のみなさん、お元気ですか?」である。(1)(2)は、「楽しい」内容として思いつきそうなの。だが、(3)は「友朋」なら、そのほとんどが、今記事を書かせていない会員に対して、個別に送る「手紙風」メッセージである。「書き手」として登場していきなくとも、「友朋」であることに変わりはない。特集自体に、そのようなメッセージが込められている。

(編集委員 山根 繁樹 記)

令和2年版「同窓会名簿2020」発刊しました

本同窓会は、すでにお知らせしておりましたとおり、令和2年版「同窓会名簿2020」を予定通り十一月十五日に発刊いたしました。

情報提供やご購入予約、そして名簿作成賛助金など卒業生の皆様には様々なご協力やご支援をいただきました事に對しまして、あらためて御礼申し上げます。

お申込みいただいた方への発送は終了いたしました。が、新たにご購入の希望がある方につきましては、若干の余裕がありますので、同窓会事務局(火曜・金曜の午後在室)まで一報いただければ対応いたします。できましたらFAXでご連絡いただけますと助かります。(TEL&FAX 〇八五二一三二一六二九七)

この名簿を個人情報の扱いに留意しながらお互いに活用されることで、同期生、同じ研究室、同じ講座、同じ専攻、同じ部活やサークル、そして同じ支部などにおいてこれまで以上につながりが深まり、同窓会活動の活性化の一助になりますことを願っています。